

Book Review



月刊「デンタルハイジーン」別冊
歯科衛生士だからできる!

中年期・プレ高齢期の患者さんへの 気づきと対応

口腔衛生指導から食事指導まで

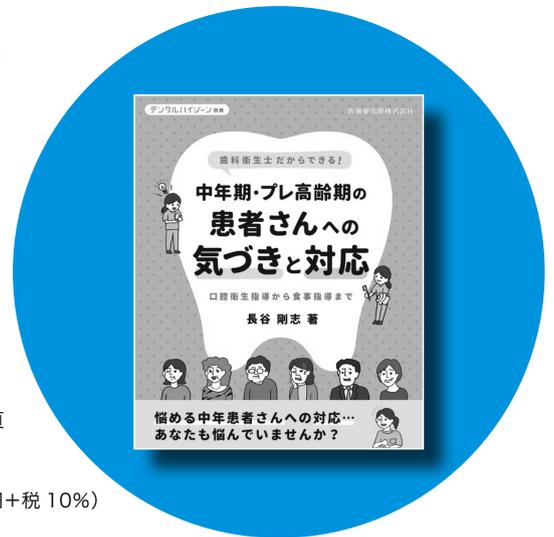
長谷剛志 著



Reviewer

若林健史 Kenji Wakabayashi
(東京都・表参道若林歯科医院)

AB判, 104頁
カラー
定価 3,960円
(本体 3,600円+税 10%)
医歯薬出版刊



本書は、中年期からプレ高齢期へ移行する患者の「食べる力」「気づく力」「口腔機能の変化」を多角的にとらえ、歯科衛生士が主体となって支援できる道筋を具体的に示した実践的な指南書である。長谷剛志先生は、単なる加齢変化の説明ではなく、“なぜ中年期に問題が起こるのか”“患者はどんな背景で変化を感じるのか”という本質的な視点を提示しており、読者は中年期の患者像をより立体的に理解することができる。

とりわけ印象的なのは、Chapter 1で展開される「中年期に必要な食べる力」という概念である。食べる力を「生命の基盤」と捉え、生活習慣・心理・筋力低下・ライフイベントなど多くの因子が複雑に絡み合い、口腔機能低下へとつながっていくプロセスを丁寧に解説している。さらに、口腔機能低下症のリスク要因を踏まえ、患者自身が気づきやすい視点へ導く文章構成は、

歯科衛生士が説明に活かしやすい内容となっている。

続く Chapter 2「気づく力」では、本書の特長である“臨床に直結するツールの充実度”が一層際立つ。咀嚼や嚥下、唾液量、姿勢、発声といった多角的な視点を盛り込んだ各種チェックシートに加え、食行動の変化を丁寧に拾い上げる評価項目や、生活背景を可視化できる記録ツールが豊富に紹介されている。これらは歯科衛生士が日常診療で無理なく活用できるだけでなく、患者自身の気づきを促し、前向きな行動変容へと導く実践的な支援ツールとなっている。

Chapter 3では、中年期特有の口腔環境の変化を具体的に示し、その指導法を丁寧に解説する。忙しさやストレスによる食生活の乱れ、咀嚼力低下、唾液分泌量の変化、歯周疾患リスクの増大など、まさに中年期に頻発する問題を臨床写真やケースとともにわかり

やすく説明している点は、実践書として非常に価値が高い。また、これらの変化を単に“老化”と片付けず、生活習慣や心理状態と結びつけて理解しようとする姿勢は、患者に寄り添う歯科医療の本質を示している。

本書は、歯科衛生士を“口腔ケアの実践者”としてだけでなく、“患者の中年期を支える伴走者”として位置づけている点に魅力がある。中年期は、体・心・生活が大きく揺れ動く時期であり、その変化を誰よりも早く察知し、適切に介入できるのは歯科衛生士であるという確信が全体を貫いている。

豊富なチェックツール、臨床例、生活背景への深い洞察が統合された本書は、今後ますます増える中年期患者への対応を支える重要な一冊であり、歯科医師・歯科衛生士ともに手元に置いておきたい実践書である。